

山形探訪の旅 2023



2023年8月

旅のチカラ研究所 植木圭二

旅友たちと山形を旅していた。日本をこよなく愛するフランスの友人が来日するので、日本の古き良き時代を知ってもう旅を企画した。そしてせっかく山形まで行ったので一部のメンバーと残留して蔵王の温泉にも浸かってきた。

第一章 山寺と銀山温泉

■古き良き日本への旅

今回の旅の企画はフランスの友人が日本にやって来ることから始まった。そのフランス人の名はドミちゃん、私よりも10才くらい若い紳士で、日本の古神道や茶道をこよなく愛している。

彼と私の出会いは複雑かつ奇妙だが、簡単に言うと友達の友達は友達という間柄で、昨年知り合った。(詳しくは旅行記「東京小旅行 2022」参照)

私はドミちゃんにもっと日本の良さを知ってもらおうと、旅のコンセプトを「日本の古き良き時代、その心に触れる」として大正ロマン漂う「銀山温泉」や修験道の聖地「出羽三山」などを体験する山形の旅を企画した。その企画は日本人にとっても魅力的なので私の旅友たちに声を掛けた結果、5人のメンバーが加わり、合計7人になった。

今回一緒に旅をする男性メンバーは、和歌山県に住むカメラ好きのヨットマンのヨコさん、神奈川県に住んでいる元同僚のカマちゃんは私が会社勤めをしていた時から一緒に旅している。女性メンバーは、千葉県に住むミーサは歴史も詳しいがフランス語も話せる才女、神奈川県に住むチーマは旅とオペラで忙しいアクティブ・レディ、岡山県に住むキキちゃんは草や花そして料理に造詣が深い。

私は全てのメンバーと何回か旅をしているが、メンバー同士では初対面という人たちもいるので、このグループそのものが友達の友達は友達という間柄と言っていいだろう。

夏の暑い日の朝、私たち7人は山形駅に集合して、1台のレンタカーに乗って古き良き日本を体験すべく山形探訪の旅が始まる。

■山寺

最初の目的地は山形市から比較的近い立石寺、この寺の奥の院は山の上の方にあり、1015段の階段で登るため、山寺という愛称で知れ渡っている。

私たちの車が山寺に着く直前、私のスマホの呼び出し音が鳴る。相手は先日九州の旅と一緒に行ったシロちゃん、彼は山形でフルーツ農園を営んでいる。そのシロちゃんが迎えに来てくれており、彼の知り合いの駐車場に案内してくれる。もちろん無料で、さらに彼が育てた朝採りのモモを差し入れてもらう。

これにはメンバー全員が驚いている。実にありがたい旅友のサプライズに感謝しかない。

まずは本堂を参拝する。そしてシロちゃんに見送られ、1015段の階段に挑戦する。最初は木立の中なので日陰で涼しかったが、上に登るにしたがって木立が無くなり直射日光がきつく暑くなり、その代わり景色が良くなる。上になると苦労も多いが見える景色も違うという人間社会に似ている。



【立石寺本堂（根本中堂）】



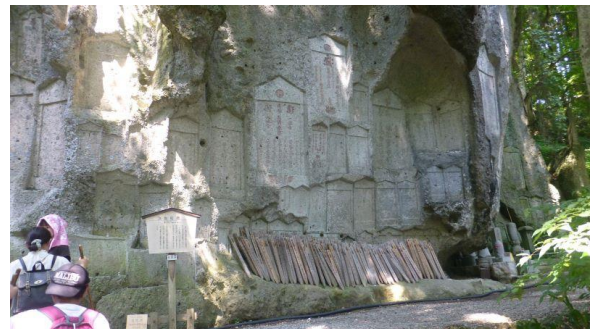
【奥の院近くの五大堂から見た景色】

松尾芭蕉はこの寺で「閑さや岩にしみいる蟬の声」と俳句を詠んでいるので、江戸時代は蟬が鳴いていたのだろう。だが、今は蟬の声は全く聞こえない。

実は、蟬は25℃～33℃で鳴くが、それ以上になると鳴かなくなる。だから蟬が鳴かなくなったら熱中症に注意しろと言われていた。松尾芭蕉がこの寺を訪れた頃と今とでは全く温度が変わっていることが奇しくも証明されてしまった。古き良き日本は涼しく過ごしやすかった。

奥の院近くには凝灰岩の岩肌が自然の力で削られた岩壁がある。これは弥陀洞（みだほら）と呼ばれ、光の当たり方によって高さ4.8mの阿弥陀如来の姿が見えるとされ、その姿を見た人は幸福になると言われている。しかし私にはどうやってもそのように見えなかった。

NHKの「プラタモリ」でこの奇岩の生成について説明していたと別の観光客が教えてくれる。



【弥陀洞】

ようやく奥の院にたどり着く。こういう時は清々しい達成感が残るものだが、夏の日差しは私たちに容赦なく襲い掛かって、汗びっしょりで清々しさはない。それでも皆はいい顔をしている。



【奥の院近くの五大堂にて】

山寺を後に車は次の目的地に向かう。その車内の様子が面白い。

車内は3列シートになっており、運転をしている私と助手席に座ったカマちゃんはルートの相談をしている。2列目のヨコさん、チーマ、キキちゃんの3人は最近行った旅行で何を食べて美味かったとか、あの晩は飲み過ぎたとか他愛のない話をしている。3列目のドミちゃんとミーサはフランス語で話をしている。もちろん何を話しているかは他のメンバーには分からない。

初対面のメンバーも打ち解け、国際交流も進んでいる。山形探訪の旅と平行して車内でも別の旅が進んでいるように感じられる。これだから旅は面白い、そしてやめられない。

■ 銀山温泉

次の目的地の銀山温泉に近づいてくる。私はルームミラーを見ながら車内のメンバーに向かって、「銀山温泉初めての人？」と訊ねると、全員が「ハイ！」と元気な声で応えてくれる。

誰もが銀山温泉に期待してきたと言っており、かく言う私も5年前に妻と来ただけで、その時に泊まった旅館を今回も予約した。(詳しくは旅行記「日本一周鉄旅 2018」参照)

温泉街は川の両岸に12軒の宿が軒を連ねて建っている。その有様が大正ロマン溢れる風情ある街並みとして人気がある。宿が少ないので予約が取り難いから、希少価値でまた人気が出るという好循環になっているようだ。



【古勢起屋別館の外観 前に橋がある】



【古勢起屋別館の玄関】

予約した宿「古勢起屋別館」に入り、茶髪の若い美人女将から説明を聞く。いや、女将ではないかも知れないが、ここは女将としておこう。

夕食や風呂の時間、姉妹館の露天風呂のこと、そして何よりも嬉しいことは深夜0時までアルコール類が飲み放題になっていると説明してくれる。

生ビール、ワイン、焼酎、日本酒が冷やしてあって、部屋に持って行っても、食事の時に持ち込んでもいい。さらに旅館の前の橋の上には足湯とテーブルが置かれているので、足湯に浸かって温泉街を見ながら冷たいものを飲むのがお勧めと言っている。これは5年前にはなかったサービスだ。

夕食や風呂のことなどは上の空で聞いていたメンバーたちだが、これには異常に反応して、「ほんとう」「すげえ」「さすが銀山温泉！」と歓喜の声が聞こえてくる。美人女将は「この人たちはどれほど呑兵衛なの・・・」と呆れていたに違いない。

私たちは、まずは冷たい生ビールを飲んで旅の疲れを癒す。部屋からの眺めは抜群に良く、対岸の古い建物、宿の玄関前の橋に設けられたテーブルと足湯も見下ろすことができる。



【古勢起屋別館からの眺望 宿の前の橋のテーブルと足湯】

そして大正ロマン溢れる街並みの散策に出掛ける。とは言っても12軒しか旅館がないので、簡単に見終わってしまう。それでも温泉街は活気に溢れて、多くの宿泊客や日帰り客で賑わっている。若いカップルや女性グループ、外国人も多く、むしろ高齢者が少ないのに驚く。このような光景は他の温泉地ではあまり見ない。

近くにいた旅館の人に「コロナでお客が少なくて大変だったでしょう」と水を向けると、「いえ、銀山温泉はコロナの影響はほとんどなく、そんなに変わりませんでした」と言っている。

報道では温泉地は閑散として大変だと聞いていたが、最初はともかく、人気があるところは受け入れ側が制限しない限りこれぞチャンスとばかりにお客が来るのだろう。私もコロナ禍でもそれなりに旅行に行っていたことを思い出した。それにしても恐るべき銀山温泉だ。

古勢起屋別館の姉妹館「銀山荘」にやってくる。銀山荘は温泉街から少し離れたところにあるので、大正ロマンの街並みはなく、目の前には自然しかない。だから開放的な露天風呂がある。

街並みがないことを露天風呂と近代的な建屋で補完して、古風な古勢起屋別館と連携して相乗効果を狙う作戦だろう。

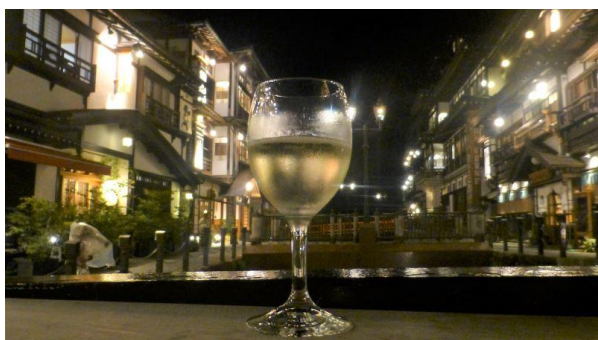


【銀山荘の露天風呂 奥は寝湯（宿のHPより）】

その開放的な露天風呂で、大阪から来たという人と話をする。驚いたのは、彼の旅のスタイルで、行きたい地域の格安航空券をウオッチしていて、それが入手できたら行程を組んで宿を予約するという。私が「今回はおいくらですか？」と聞くと、彼は「伊丹から山形までの往復で1万5千円でした」と答える。これには同じ関西から来たヨコさんも仰天していた。

宿の夕食は上品に仕上がっている。時々私が旅行記の中で、山奥の温泉旅館で海の幸それも刺身などが出てくると興ざめすると書いているが、ここではそんなことはない。地元の食材を上手に使っており、もちろん美味しい。（メニューは第四章 appendix 参照）

夕食が終わって、大正ロマンの街並みに再び繰り出す。今度は足湯に浸かって、風情ある夜の街並みを見ながら、宿の飲み放題のスパークリングワインをいただく。メンバーは皆大喜びで、銀山温泉の夜を楽しんでいる。



【夜の銀山温泉を背景にスパークリングワイン】



【盛り上がるメンバーたち】

銀山温泉は昼間も良いが夜景もまた良い。昼間撮った街の写真と同じアングルで夜撮るとその対比によって実にいい感じで温泉街を表現できる。まあ、実際には太陽が完全に沈んだ夜よりも夕方の方が空の色が少し暗い青色をしていて映えるのだが、今回は夜になってしまった。

そのことを事前にメンバーに伝えていたので、皆は昼に撮ったカメラスポットで夜も撮っている。写真の好きなヨコさんは何十枚も撮っていた。



【銀山温泉の昼と夜】

夜はお決まりの部屋飲み宴会になる。話題は銀山温泉の感想や旅の話を中心に尽きることがないが、あまり良く覚えていないのが常である。

そんな中、私が露天風呂で聞いた伊丹・山形の往復航空券が1万5千円の話をしたら、ミーサが、「大学生の子供がオーストラリアに行くのに、現地の友人がとってくれたマニラ乗り継ぎ航空券は往復3万円でしたよ」と話していたことは衝撃的だった。

■銀山温泉のルーツ

銀山温泉は名前が示すように昔は銀の鉱山で、その銀鉱山は室町時代に開かれた。江戸時代の日本は金本位制ではなく銀本位制だったので銀の需要は多く、この地も繁栄して最盛期は人口30万人に迫るほど栄えた。そしてその時代に鉱夫が温泉を発見した。それは江戸時代初期1614年で、その後は銀の産出量が減り銀鉱山は1689年に閉山した。

銀鉱山は閉山したが、温泉は江戸時代から湯治場として賑わった。

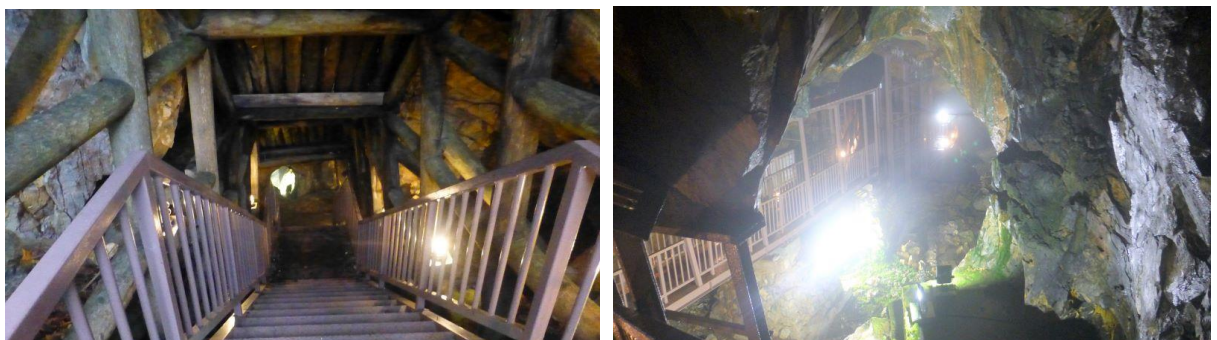
ところが大正時代になってすぐ1913年の大洪水により温泉街は壊滅した。それでも大正時代の終わり頃から再び旅館が建てられはじめたので正真正銘の大正ロマン溢れる温泉街になっていた。

そしてNHKの朝ドラ「おしん」で全国的に知れ渡り、さらにアメリカ人女性が女将を務める「青い目の女将の旅館」も登場して話題になり、現在の地位を築いた。

翌朝、私たちは少し早起きをして銀鉱山跡を見物に行く。温泉街を流れている銀山川の上流に向かって歩いて行くと水量豊かな滝があって、滝を過ぎると10分位で銀鉱山跡に着く。

銀鉱山の入口は狭いが中は結構広い。何よりも自然の冷蔵庫で、外は朝だというのに既に30℃くらいあるが、中は非常に涼しく気持ちが良い。そして照明によって映し出される光景はまるで鍾乳洞のようだとチーマが言っている。鍾乳洞は自然が造ったもので、この銀鉱山は人間が掘ったもので成り立ちは異なるが、どちらも見事な芸術のように感じられる。

そしてこれだけの設備なのに無料開放というのも素晴らしい。カマちゃんが「これは旅館のアルコール飲み放題に匹敵する」と言うと、ドミちゃんも「銀山温泉、フトッパラ！」と言って、笑いをとっていた。



【銀鉱山跡の入口と内部】

第二章 出羽三山

■湯殿山

山形探訪の2日目、私たちは山形県の西部にある湯殿山にやって来る。と言っても湯殿山の山頂ではなく、中腹にある湯殿山神社本宮が本日の最初の目的地になる。

私たちは本宮の手前の標高約900mの駐車場に車を停める。駐車場の前には大きな赤い鳥居があって、私たちを迎えてくれる。この大鳥居は大きいだけでなく、鳥居の足を前後に支える柱が前後についている両部の鳥居になっており格式が高い。



【大鳥居 写真のアングルで高く見えないが実は高さ18m】

ここから約30分歩くと標高約1050mの場所に本宮があって、そこでの参拝が今回の旅の目的のひとつになっている。

30分程歩き、本宮の入口に到着する。ここまでは小型バスも運行しており、体力に自信のない人はバスを利用している。

問題はここから先で、全てが謎に包まれている。その理由は神域とのことで写真撮影が禁止されており、ガイドブックやインターネットでも写真がない。その内容を記した説明記事もない。



【湯殿山案内図 本宮のイラストはイメージのみ】

私たちは細い山道を登り、そして降りて、谷間にある湯殿山神社本宮に到着する。本宮といっても社殿のようなものはない。神体は湯殿山そのものなので、それを祀る建物や人工物は存在しない。社殿はないが、神域とのことで靴を脱いで裸足での参拝になる。私もいろいろな神社を参拝しているが、社殿もないのに地面を歩くのに裸足になるのは珍しい。参拝者は個人だけでなく団体もおり、老若男女、結構な賑わいを見せている。

裸足になってから、入口で1人500円の祈祷料を払い、神主から祈祷をしてもらう。私たちが遠くから、それもフランスから来たことを告げると、神主は気合を入れて祈祷してくれた。

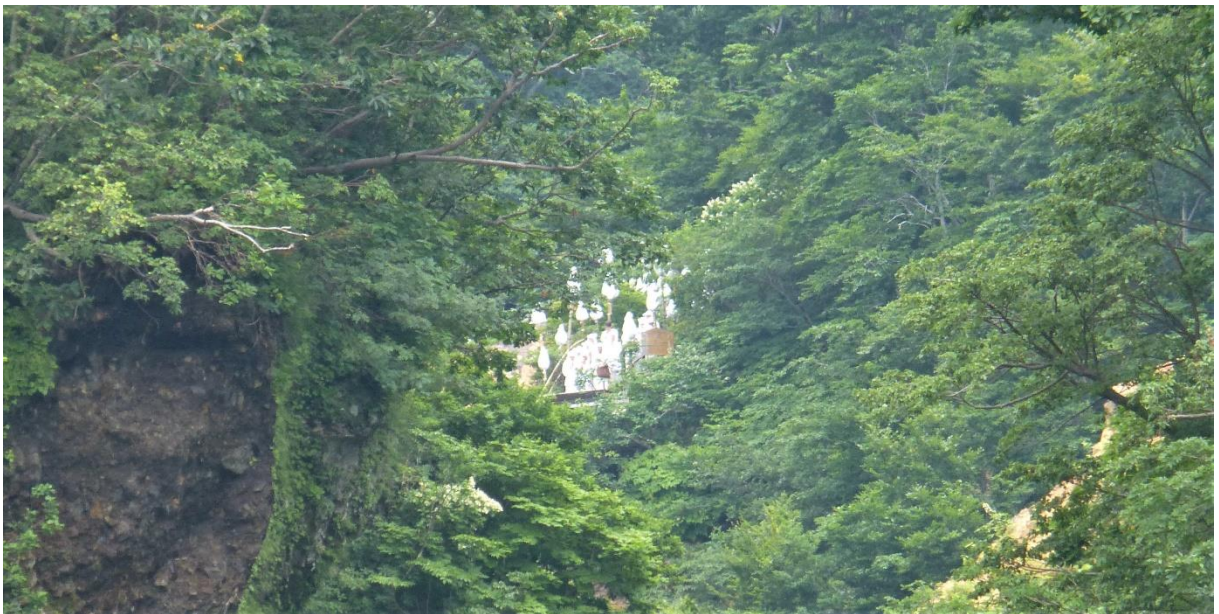
そして裸足のまま通路をしばらく歩いていくと、神体との対面になる。いや、神体は湯殿山そのものなので、神体に見立てたものがあって湯殿山の名前のように温泉に関係し……。おっと、ここで止めておこう。これ以上書くとご利益がなくなる。

戻ってくると足湯がある。もちろん温泉で、そこで裸足で歩いた足を洗い、温めるようになっている。この湯が結構熱いが気持ち良い。

大鳥居に戻る途中で、ふと後ろを振り向くと遠くの谷間に謎の白いものが見える。灯籠のようなものを白い布で包んだものか、白装束の信者の集団か、よく分からない。

そういえば私たちが神体らしきものを拝んだ後に、下界を見下ろす遥拝所のようなものがあったことを思い出した。

私は直ぐにシャッターを切る。実はもっとズームアップできるのだが、このくらいにしておかないとご利益が無くなる。



【本宮付近の謎の白い集団 あえてズームは抑えている】

再び大鳥居まで戻り、車に乗り込む。すると裸足になって祈祷してもらったことが、夢の中の出来事だったかのような気持ちになっていることに気が付く。SF映画などで見てはいけないものを見た後に記憶を消すシーンがあるが、あの祈祷によって記憶を消されたのかもしれない。

■修験道の聖地

修験道とは、山で厳しい修行を行うことで悟りを得る日本古来の山岳信仰で、その実践者を修験者または山伏と呼ぶ。修験道は森羅万象に命や神霊が宿るとした古神道に、山岳信仰と仏教が習合し、密教などの要素も加味されて確立された。

ドミちゃんが神道、それも古神道つまり天皇家を頂点とする国家神道ではなく、日本古来の土着の神道に興味があるとのことで、私は今回の旅の目的地に修験道の聖地を選んだ。

日本三大修験道の聖地というのがある。奈良県の大峰山は修験道開祖の役小角（えんのおずの）が開いた修験道発祥の地。福岡県大分県の県境の英彦山（ひこさん）は最盛期に 3800 の僧坊があった。そして出羽三山は 593 年に崇峻天皇の子の蜂子（はちこ）皇子が開いた。

出羽三山とは、先ほど祈祷してもらった湯殿山、羽黒山、月山のことをいう。三山にはそれぞれ役割があって、羽黒山は現世のご利益、月山は死後の体験をして、湯殿山は新しい生命をいただき生まれ変わるという珍しい修行形態になっている。

それぞれの山に神社があり、これらを総称して出羽三山神社と言っている。羽黒山にはそれら 3 つの神社の神を併せて祀る三神合祭殿がある。

■羽黒山

私たちは羽黒山の山頂の出羽三山神社（出羽神社）にやって来る。羽黒山は標高 414m の低い山なので山頂に駐車場があって車で来ることができる。

当初の計画では標高 150m 付近に多くの宿坊が集まっている集落があり、そこに車を置いて参道を歩いて途中の国宝の五重塔を見て出羽三山神社まで登る計画だったが、それを変更した。理由は五重塔が現在改修中で全く見ることができないからだ。

境内の入口には鳥居がある。格式のある両部の鳥居で、その真下に「下乗」と書かれた立て看板がある。下乗とは馬から降りろという意味だから時代錯誤ではあるが、神聖なる場所ということが伝わってくる。



【三神合祭殿の鳥居 下乗の立て看板】

広い境内で一際目立つのは三神合祭殿と呼ばれる社殿で、三社を代表しているから大きく立派な造りをしている。高さ 28m、茅葺屋根が特徴的で、その厚さは 2mもある。尊厳と歴史を感じる建物になっており、国の重要文化財に指定されている。

社殿入口の上にも湯殿山神社、月山神社、出羽神社の三社の名前がしっかりと刻まれている。



【三神合祭殿】



【三社の名前】

境内には末社（まっしや）もある。末社とは本社に付属する小さな神社のことで、出羽三山には「百一末社」と称して、羽黒山、月山、湯殿山の山嶺や谷に多数の末社が散在している。この境内にも大雷神社、健角身神社、稲荷神社、大山祇神社、白山神社、思兼神社、八坂神社がある。そういえば湯殿山神社に行った時も小さな末社をいくつも見かけた。



【7つの末社】

■宿坊に泊まる

本日私たちの泊まる宿はこの境内にある宿坊「斎館」で、歩いて行くその標識があり、さらに進むと「随神門」という立派な門がある。この門の向こう側は出羽三山の神域となるといわれており、神域は遠く月山や湯殿山まで広がっている。

随神門をくぐり、神域に立ち入る。目の前には古い寺の本堂のような建物がある。この威風堂々とした風情ある建物が斎館で、神社の付属施設のように見える。五重塔の下に宿坊が多くあると書いたが、この斎館はそれらの宿坊とは全く別格で次元の違うものようだ。



【宿坊「齋館」への道】



【随神門 門の奥に齋館が見える】



【齋館の玄関前】

齋館はもともと華蔵院という寺で、元禄時代に作られたというから 300 年以上経っている。昔は神仏習合だったが、明治の神仏分離の際に神社の一部として残った。山伏が泊まった宿坊として今も残る唯一の建物と言われている。

私たちは築 300 年以上の玄関から建物に入る。立派な玄関の奥は、ヒンヤリとした空気で満たされており、神秘的な世界に入り込んだと感じる。

そして私たちの泊まる部屋に通される。

部屋は広い。それもとんでもなく広い。畳の間が 3 部屋あって、畳の数を数えると 24 畳と 16 畳と 16 畳で、3 部屋が襖で仕切られている。つまり合計 56 畳もあり、1 人当たり 8 畳ということになる。

畳は江戸間ではなく本間サイズなので余計広く感じる。部屋の周りには畳敷きの広い廊下が 2 方向にあるから解放感抜群で、もはやこれ以上言いようがない。

この広く贅沢な部屋を見て誰もが驚いている。ドミちゃんも大感激をして「スバラシイ！」を連発している。私も何軒か宿坊に泊まったことがあるが、この広さとこのような雰囲気抜群の宿坊は経験したことがない。



【斎館で泊まった部屋 手前が 24 畳、奥の 2 部屋が 16 畳と 16 畳】

風呂は大浴場が男女別にあるが、部屋に比べると小さい。5~6 人も入れればいっぱい大きさで、宿泊者数からすれば最低限のサイズだろう。比較的新しいので最近造ったものらしいが、温泉ではなくボイラーで沸かしているのに 24 時間入浴できるのはありがたい。

食事処は何十人も一緒に食事がとれる広さになっており、現代風に椅子とテーブルが並んでいる。夕食はもちろん精進料理で、食事処の廊下にはここの精進料理の説明書きがあり、以下のように書かれている。

昔から羽黒山に伝わり、現在も斎館の膳にのぼる精進料理は、「奥の細道」で出羽三山を訪れた芭蕉をもてなしたともいわれている。出羽三山山麓で採れる旬の山菜や筍を素材に、羽黒独特のしきたりを守り続けた絶妙な味わいがある。



【食事処】



【精進料理】

私たちが席に着くと宿の人から精進料理の説明がある。全ての皿の料理の由来や味付けなどを説明してくれたが、残念ながらあまり覚えていない。

ただひとつ覚えているのは味噌汁の具にトウモロコシが入っていたことで、これには隣に座った専門家のキキちゃんも驚いていた。トウモロコシの甘みと風味が味噌汁にこれほどマッチするとは思わなかったと彼女は言っていた。



【トウモロコシの味噌汁】

夜はいつものように宴会になるが、こんな風情のある部屋での宴会は否応でも盛り上がる。どんなに騒いでも周りの気を使うこともなく、夜はどんどん更けていく。

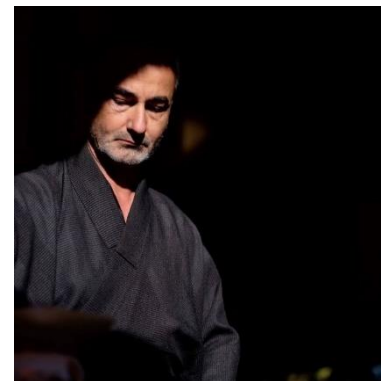


【宿坊の夜】

話は様々ことに及ぶ。旅の話に始まり、どうして今ここに7人が揃って酒を飲んでいるのか、夫婦のライフスタイルの話も面白い。そしてやはり日本とフランスの相違点、類似点は当然話題になる。

ドミちゃんが古神道以外に茶道の裏千家をやっていることにも話が及び、彼が茶道のお点前（てまえ）の様子を写した写真を見せてもらった。それがまるで別人、トムクルーズのようだった。

やはり“平たい顔族”の日本人ではこうはならない。



【ドミちゃんのお点前の様子】

宴会もお開きになり、寝静まると、山奥の静寂の中にあることがよく分かる。虫の音だけが聞こえてくる。いや誰かのイビキと虫の音が合唱している。さすがにハモってはいないが、イビキも風情あるものに感じるのはさすがに神域の宿だ。

翌朝も精進料理を食べて、出発しようと玄関を出る。

団体客が泊まっており、その人たちと言葉を交わす。地元の人たちで、毎年一族郎党揃ってマイクロバスで出羽三山参りをしているという。

私たちが今回の旅について紹介し、フランスからも来ていると説明すると、マイクロバスの運転手がいきなり「昨日会いましたね」と言っている。彼は「昨日は神主でしたが、今日は運転手やっています」と笑っている。何と、運転手は昨日参拝した湯殿山神社本宮で祈祷をしてくれた神主だった。神域での仕事ゆえに神出鬼没なのか。

■月山

月山は一般的には夏スキーで有名な山だが、信仰の山でも有名で、その頂上には月山神社がある。標高 1984m とかなり高いが、スキー用のリフトが標高 1500m まで運んでくれるので高低差約 500m の道のりを約 3km 歩くことになる。今回の旅では最も難所と言った方が良いでしょう。

リフトから降りて、登山届を出して登り始める。今は真夏で晴天が続いており、登山者も多く遭難の心配もないが、少し季節を外すとどうなるか分からない。

最初はなだらかな上り坂が続き、小石と土の道はやがて木道になる。木道がしばらく続き、そして岩場の急角度の上り坂になる。

ヨコさんはストックを持って来ているから用意がいい。そのストックの片方をキキちゃんに貸してあげるのはいかにも親切なヨコさんらしい。

夏スキーができる山なので雪渓が残っており、雪渓から湯気のようなものが出ている。目に見えない水蒸気を多く含んだ暖かい空気が、雪渓で冷やされ、水蒸気が凝結して目に見える湯気になったのだろう。

雪渓があることからすれば気温は相当に低い、体力を使ってエネルギーを大量消費しているので体は火照って汗が出てくる。しかし動かないでいると汗がひいて風が吹き付けるので寒さを感じる。なかなか体温調節が難しい。



【雪渓】



【岩場の登山道】

それでも気持ち良く、清々しさを感じる。行き交う人々に「こんにちは」と声を掛けるのも爽やかな気持ちになる一因かもしれない。

雪渓を下に見るところまで登ってくると、さらに急坂になって手を使うことも多くなる。

私は手袋を持ってくれば良かったと少し後悔する。キキちゃんも綿パンをはいてきたので汗と湿気で足にまとわりつき足が曲がらないとこぼしている。他にも装備で後悔しているメンバーもいる。私が計画書に装備について書くべきだった後悔する。しかしながらこのような後悔が次の旅で活かされて、旅は進化していくことになる。

降りて来る人にあとどのくらいかを聞くと、「もう少しですよ、あのピークを越えるとなだらかになります」と教えてくれるが、私はあのピークが山頂だと思っていたので幾分かっかりする。

1時間40分の苦闘の末に、山頂の月山神社に辿り着く。この神社も神域なので撮影禁止になっており鳥居の前で記念撮影をして祈祷をしてもらう。さすがに神主はあの運転手ではなかったが、祈祷の文言も作法も同じだった。



【月山山頂の月山神社 この鳥居の奥は神域で撮影禁止】

皆は晴れ晴れとした顔をしている。単に登山の達成感だけではなく、神域の月山の山頂に立って身も心も清められたからだろう。ひとつの挑戦をやり遂げて、次のより大きな挑戦もできるような気持になる。これが修験道だとは言わないまでも、その一端は体験できたかもしれない。

2日間かけて出羽三山を体験した。月山の死後の体験や湯殿山の生まれ変わり体験までは至らないまでも、貴重な体験ができた。特に羽黒山の現世のご利益は齋館によるところが大きい。

修験道云々もあるが、非日常それも強烈な非日常体験だったので、私の持論の「旅は非日常への移動」という考え方にも共鳴する。私の今後の旅の方向性に影響を与えるものになった。

■打ち上げ

月山を下山し、山形駅でレンタカーを返し、打ち上げのために近くのレストランに入る。新幹線の発車時間まであと30分という短い時間なのに、この人たちは乾杯の生ビールだけは死守したいらしい。修験道の修行で最後まで諦めないという精神を培ったようだ。

その諦めないという成果で、キンキンに冷えた生ビールが喉を過ぎて行く。五臓六腑に染み渡るとはこのことを言うのかと思いながら生ビールを飲み干す。他のメンバーも、この世の幸せを満喫したかのような顔をしてビールを飲んでいる。これだけ良い顔ならばどこかのビール会社のCMにも使えそうな気もしてくる。

首都圏とフランスに住むメンバー4人はこれから新幹線に乗って帰るが、和歌山のヨコさんと岡山のキキちゃんは、せっかく山形まで来たのでもう少し山形を満喫したいというので私も同行して蔵王温泉に宿をとった。

帰宅組を送り出して、私たち残留組が店に残って二次会をしているとLINEで写真が送られてきた。写真は新幹線に乗った4人がシートを対面にして車内二次会をしている雄姿(?)だ。

誰もが旅を満喫した顔になっている。それにしてもこの人たちは飲んでばかりいる。

第三章 蔵王温泉

■吉田屋旅館

ヨコさん、キキちゃん、私の3人は山形駅から路線バスで蔵王温泉にやって来る。

蔵王温泉には以前は会社の保養所があったので、私は何度も来ているが、その保養所も今は閉鎖され、私にとっては久しぶりの蔵王温泉になる。

訪問回数が多いが、保養所に泊まっていたので一般の旅館は泊まったことがない。それゆえ今回の宿はコスパ重視で「吉田屋旅館」を予約した。

宿に入ると、キュートな若い女将が迎えてくれる。外観も内部も昔ながらの旅館で決して新しくはなく、学生が合宿に使うような宿と言った方が的を射ているだろう。

入口近くの壁に飾ってある写真を何気なく見ていると「秋篠宮紀子様ご来館記念」と書かれている。女将に聞くと、40年くらい前に高校生だった紀様が学習院高校科のスキー合宿で来た時の写真だという。それ以前も以降も学習院高等科の合宿に使われているというから、由緒正しい宿だと再認識する。



コスパ重視は訂正しないとイケない。

【秋篠宮紀子様 ご来館記念の写真】

長旅になっているので2人は洗濯をしたいと言っている。女将に聞くと、乾燥機付き洗濯機を使って下さいと、洗剤も自由に使っていいと言っている。

その他にも、ゆうパックを出そうとするとサイズを測って値段を計算して郵便局に持って行ってくれる代行までしてくれる。心配りも行き届いており、学習院高等科が常宿にしている理由がそこはかたなく理解できる。

宿にはもちろん温泉が引かれており内風呂があるが、私たちは宿の近くにある共同浴場に行く。確か昔は無料だった気がするが、現在は200円の協力金を箱に入れるようになっている。しかし吉田屋旅館のフロントには入湯券が置いてあり、共同浴場が宿の第二浴場になっていると言ってもいいだろう。

蔵王温泉には共同浴場は3つあり、一押しは宿に近い河原湯共同浴場だ。その理由は浴槽の底がスノコになっており、その下から源泉が湧き出ているので鮮度が良い。成分表には湧出温度は48℃、pHは1.45と書かれており、あの名湯草津温泉よりも酸性度が高い。



【河原湯共同浴場】

ちなみに私はこれを上回る酸性度の温泉はpH1.13の玉川温泉しか知らない。

■お釜を目指す

吉田屋旅館の2日目、今日はロープウェイで山に登り、そこから蔵王連峰最高峰の熊野岳を越えて蔵王の「お釜」を目指す。蔵王のお釜とは、蔵王連峰の中央部の宮城県と山形県の県境近くの宮城県側にある火口湖で、エメラルドグリーンの水を蓄えている。その神秘的な水の色が有名で多くのパンフレットにも登場している。

宿を出ようとする時女将が「これ1名分ですがお使い下さい」と言ってロープウェイの無料パスを貸してくれる。一般観光客用ではなく、山岳パトロールなどの業務用のようなパスで、私は「これ借りていいですか?」と聞くと、女将は「大丈夫ですよ、昨日はこれを外国から来たお客さんに使ってもらいましたから」と言っている。

実にありがたい。これで1800円浮くことになる。

私たちは温泉街に隣接するスキー場のロープウェイ駅からゴンドラに乗り、途中で乗り継いで地藏山頂駅に20分くらいで到着する。

地藏山頂駅は標高1661mで、出たところに大きな地藏尊が鎮座している。登山届を提出して、ここから標高1841mの熊野岳を目指し、お釜に出るトレッキングが始まる。

熊野岳までのコースタイムは50分になっており、比較的なだらかな道が続いている。それでも登山客はそれなりの装備をしており、ストックを持って登っている。



【地蔵山頂駅からのトレッキングの道】

歩き始めてしばらくして、2人の若者が元気よく降りてくる。声を掛けると、「昨日の夜に白石を出発して夜通し歩いて山越えをしてみました」と返ってくる。これには私も驚いた。我が耳を疑って、私は「白石って、宮城県の白石ですよ」と念を押す始末だ。

やはり若者は何かに挑戦している姿が似合っている。そしてその姿はもちろん格好いい。

山頂に近づくにつれて風が強くなり、雲が押し寄せては過ぎ去っていく。雲と言うよりも私たちと同じ高さなので霧と言った方が良くもしい。

標高も天候も昨日の月山に似ているが、キキちゃんもヨコさんも昨日の月山に比べれば楽なものだと言っている。そういう意味では月山は良い修行になった。

そんな時、道端に一体の座像を見つける。凄いい形相をしている老婆の像で、正座でなく立て膝をしている。なぜこんなところにこんな像があるのだろうか。

私は形相よりも立て膝に着目する。昔はインドや中国、朝鮮、そして日本でも女性が立膝で座るのが当たり前だった。ところが日本では江戸時代に茶道や華道の普及で正座が正しい座り方になった。ということはこの老婆の像は江戸時代よりも前からあって、「ここで一休みしていけば」と旅人に言い続けているのかもしれない。



【老婆の立て膝の像】

熊野岳山頂の熊野神社に参拝して、熊野岳避難小屋に付近に来るとお釜が見えてくる。そして天気も徐々に好転して晴れ間が多くなっているようにも感じる。避難小屋からお釜の外輪山の尾根まで降りてくると、さらに天気が良くなり、お釜の絶景を見ることができる。ヨコさんもキキちゃんも初めて見るお釜の神秘的な色に感激している。



【蔵王のお釜】

お釜を見ながら外輪山を半周するように歩いて行くと、レストハウスがある。多くの観光客はこのレストハウスの駐車場まで車で来るのだが、今回私たちはロープウェイを駆使して蔵王連峰の山越えをしてここにたどり着いた。

レストハウスの直ぐ上にある標高 1758m の刈田岳山頂の蔵王刈田嶺神社（奥宮）を参拝して、レストハウスで一休みする。

レストハウスの売店で山形名物と書かれた醤油で煮込んだ玉こんにやく 3 個を串に刺して売っている。あまりに旨そうなので直ぐに買って 3 人並んでベンチに腰を下ろして食べ始める。辛子をつけて食べるのだが、辛子のつけ具合が味に非常に影響する。3 人も辛い、旨い、辛いと言いながらすぐに食べきった。

レストハウス前から路線バスに乗って蔵王温泉に戻り、お釜ツアーが終了する。

■温泉街

バスは蔵王温泉街に着く。バスを降りた私がまず感じたことは街が閑散としていることだ。昨夜は暗い中を真っ直ぐ宿に向かったのであまり気にしていなかったが、今は昼間で、平日とはいえ、夏休み中なのにほとんど人が歩いていない。確かに真夏の日差しはきついですが、ここは高原で、少なくとも昔はもっと人で賑わっていた記憶がある。

このように閑散とした温泉地は全国の有名温泉地でも最近よく見かけるので、蔵王温泉に限ったことでもないが、3 日前に泊まった銀山温泉の賑わいが私の脳裏に残っており、余計にそう感じるのかもしれない。

ほとんどの土産物屋は閉まっており、たまたま開いていた酒屋に入る。酒屋の人にこの閑散とした状況を聞くと、「前の大きな土産物屋は昨年閉店しました。本日は定休日の店も多いようですが、それでも年々寂しくなりますね」と言っている。私は返す言葉も見つからず、「大変ですよ」と言いながら、「コロナも終わりこれからですよ」と他愛のない会話に終始するしかなかった。

そんな話をしながら商品を見ていると、先ほどレストハウスで食べた玉こんにゃくを売っている。宿で食べようと購入する。

宿に戻り、荷物を置き、散策に出掛ける。

高台に蔵王温泉の守り神とでもいう酢川神社があり、参道は200段以上ある階段になっている。この階段は川柳坂と呼ばれており、階段の両側の灯籠に川柳が書かれている。定期的に内容が変わるので、私はここに来るといつもその川柳を見て心を和ませていた。

今回はコロナ禍での生活ぶりを詠んだものが多く、なかなか面白い。



【川柳坂の階段と石灯籠】

酢川神社に参拝し、大露天風呂に着く。

溪流沿いのやや緑色で白濁した湯の露天風呂は蔵王温泉のパフレットやポスターに使われ、観光スポットになっているので、それなりに賑わっている。溪流のせせらぎ、木々の緑、硫黄の臭い、強酸性のやや熱い湯、味覚以外の四感で温泉を楽しむ。

湯から出て、出口のところでキキちゃんが若い女性と話をしている。露天風呂の中で知り合ったと言っている。キキちゃんは老若男女問わず、誰にでも話しかけてすぐに仲良くなれるという才能の持ち主で、観光でやって来たという彼女に河原湯共同浴場を勧めていた。

宿に戻り、酒屋で買った玉こんにゃくをつまみにビールを飲むことになるが、玉こんにゃくは土産用なので串に刺してあるのではなく、小さな玉こんにゃくが汁と一緒に袋に入っている。そのため器と楊枝が必要で、味の決め手になる辛子も含めて女将に借りに行く。さすがに厚かましいお願いかなと若干躊躇していたが、女将はいやな顔ひとつ見せず笑顔で貸してくれる。

玉こんにゃくも食べ終わり、いくら旨い玉こんにゃくでもそう空腹は満たされないので、私たちは頃合いを見て夕食を食べるために外に出る。

近くにログハウス風のお洒落なレストランがある。私が知らない店なので、最近できたようで建物も店内も新しい。若い男性2人でやっており、今までの蔵王温泉の店とはだいぶ異なる。

メニューはジンギスカン鍋と蕎麦しかない。蔵王温泉はジンギスカン鍋発祥の地を名乗っており、街の至るところにジンギスカン鍋の旗が立っている。私も何度か蔵王温泉でジンギスカン鍋を食べているが、この発祥の地という説にはいささか疑問を持っている。(詳しくは旅行記「山形の旅 2018」、または第四章 appendix 参照)

まずはビールで乾杯をして、3人でジンギスカン鍋をつつく。やはりビールとジンギスカン鍋の愛称は抜群で実に旨い。

そうこうしていると次から次へとお客がやって来る。外国人のグループも来て、店員とは英語で話をして、店内は満員なので外のテラス席に座った。

他の店が開いていないから来るのかも知れないが、やはりこの店の魅力でお客が来るのだろう。若者が2人で切り盛りし、店内は小奇麗で、肉も新鮮で味も良い。外国人が来るのは英語のメニューが置いてあるからで、SNSでも発信しているのだろう。

この店の賑わいを見て、蔵王温泉復活の予兆を感じたのは私だけではないだろう。



【レストラン「かしえる」の建物とジンギスカン鍋】

温泉街の復活に対して私が思うことは、どのような街にするのかという明確なビジョンやポリシーが必要だということだろう。湯布院温泉は住民が協議した末に心安らぐ滞在型保養地を目指した。銀山温泉は自然災害を機に偶然かもしれないが大正ロマンの街並みを創ることになった。

お客のニーズをどのように捉えてそれによって街をどう変えていくか。それは行政や観光協会だけの問題ではなく、一軒一軒の店や旅館が自ら考え実践しないといけない事なのだろう。

第四章 旅の記録

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪かったとか、あれこれ話し合っって評価項目を5段階で評価し、委員会として評価値を算出する。ただし今回は私1人の意見で決定した。

評価項目は泉質、風呂、料理、コスパ、サービス、建物・部屋、立地環境の7項目で、平均値を総合点としている。温泉は泉質と風呂で分けており、立地環境はかつて秘湯度という項目だったが、都市型の温泉もあるのでロケーションや景色を総じて評価するようにした。

評価基準は5段階としてその定義は、5は驚き感動、4は普通に良い、3は可もなく不可もない、

2は普通に悪い、そして1は失望落胆としている。

銀山温泉「古勢起屋別館」は泉質 4、風呂 3、料理 5、コスパ 4、サービス 5、建物・部屋 4、立地環境 5、総合点 4.29 になった。アルコール飲み放題を評価に加味した。

湧出温度は 66.5°C、pH6.9、泉質は含硫黄・ナトリウム・塩化物・硫酸塩泉だった。

羽黒三山神社の宿坊「斎館」は温泉ではないが、記録に残すため温泉以外を評価した。泉質、風呂、料理 4、コスパ 4、サービス 3、建物・部屋 5、立地環境 5、総合点 4.2 になった。

蔵王温泉「吉田屋旅館」は泉質 5、風呂 3、料理、コスパ 5、サービス 5、建物・部屋 3、立地環境 4、総合点 4.17 になった。料理は朝食のみなので評価しなかった。

湧出温度は 45.4°C、pH は 1.7、泉質は含硫黄・鉄・アルミニウム・硫酸塩・塩化物泉だった。

■旅の記録

実施は 2023 年 7 月 30 日（日）～8 月 3 日（木）の 4 泊 5 日、その行程を示す。尚、本文の記載順番と実際の行程が異なる部分もあるが、以下の行程が実際のものになる。

- ・ 1 日目 東京駅発 8 時 08 分の山形新幹線で 11 時 04 分山形駅に到着、レンタカーを借り、山形駅から約 60km 移動し、12 時 30 分の山寺の立石寺に到着、山形に住む友人に会って、1015 段の階段を登り参拝し、下山途中で昼食、約 50km 移動、15 時 30 分に銀山温泉「古勢起屋別館」にチェックイン
- ・ 2 日目 早朝に銀鉦山跡まで散策、宿を 8 時 30 分に出発し約 85km 移動、湯殿山駐車場に 11 時に到着、駐車場から約 30 分歩いて湯殿山本宮で参拝、13 時駐車場に戻り、約 45km 移動し 14 時羽黒山の駐車場に到着、羽黒三山神社の宿坊「斎館」にチェックイン、出羽三山神社参拝
- ・ 3 日目 宿を 8 時 30 分出発、約 60km 移動し、月山スキー場駐車場到着、リフトに乗り、10 時 30 分リフト上駅から月山山頂までトレッキング、約 1 時間 40 分で登頂、月山神社参拝、下山途中で昼食、リフトで降りてスキー場駐車場到着、約 60km 移動し 16 時に山形駅到着し、レンタカー返却後、短時間の打ち上げ、帰宅組は 17 時 05 分山形駅発の山形新幹線で東京へ

*** 以上が山寺・銀山温泉・出羽三山の旅、以降は蔵王の旅 ***

蔵王温泉連泊組は 17 時 40 分発のバスで蔵王温泉に移動し
蔵王温泉「吉田屋旅館」にチェックイン、居酒屋で軽い夕食

- ・ 4 日目 宿を 8 時に出て 8 時 30 分のロープウェイに乗って地藏山山頂駅に 9 時到着、トレッキングを始めて 10 時 30 分の熊野岳山頂に到着、お釜の淵を回り、途中で昼食、刈田岳山頂の蔵王刈田嶺神社奥宮を参拝し、蔵王山頂レストハウス 13 時発バスで、蔵王温泉に戻り、温泉街付近を散策 河原湯共同浴場入浴、川柳坂経由で酢川神社参拝、大露天風呂入浴、

レストラン「かしえる」でジンギスカン鍋の夕食、宿に連泊

- ・ 5日目 宿を7時30分出発し、バスで山形駅へ、山形駅発9時03分の山形新幹線乗車
東京にて解散

山寺・銀山温泉・出羽三山の旅の7人旅の費用の合計は312573円、1人当たりでは約47000円になった。

- ・ 宿泊費 230250円
銀山温泉「古勢起荘別館」151750円（7人分）
羽黒山宿坊「齋館」78500円（7人分）
- ・ 交通費 52714円
レンタカー32120円（1台分）
ガソリン6384円（1台分）走行距離338km
高速道路と有料道路2710円（1台分）
月山スキー場駐車料金1000円（1台分）
月山リフト10500円（7人分）
- ・ 入場料や祈祷料など 8600円
山寺入場料2100円（7人分）
湯殿山神社祈祷料3500円（7人分）
月山神社祈祷料3000円（6人分）
- ・ その他 37436円
昼食と夜の飲み物など21009円（7人分、3日分）
事前手配費用や企画料16427円

蔵王温泉の3人旅の合計は94457円、1人当たりでは約31000円になった。

- ・ 宿泊費 55700円（3人分）
蔵王温泉「吉田屋旅館」55700円（朝食付き2泊、3人分）
- ・ 交通費 13830円（3人分）
ロープウェイ3600円（蔵王山麓駅～地蔵山頂駅2人分、1人分は宿の無料パス）
バス4230円（遠刈田岳山頂レストハウス～蔵王山麓駅 3人分）
山形駅～蔵王温泉の往復のバス代6000円（3人分 ただし各自で支払う）
- ・ 食事や飲み物など 24927円（3人分）
居酒屋8000円（3人分）
コンビニ4477円（3人分）
玉こんにゃく450円（3人分）
ジンギスカン10350円（3人分）
大露天風呂入場料1650円（3人分 宿の割引券を利用）

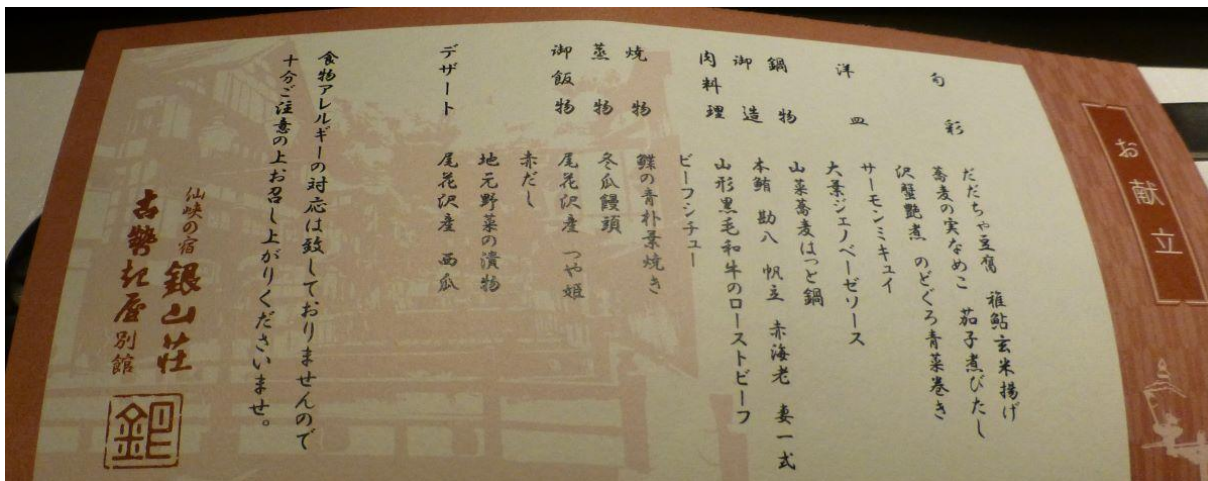
費用は前半の山寺・銀山温泉・出羽三山の7人旅が47000円、蔵王温泉の3人旅が31000円、他に横浜～山形駅までの往復交通費が16920円（ジパング倶楽部で3割引後の価格）、総合計で

は94920円、結局のところ約10万円になった。

■appendix (付録)

参考資料や本文と直接的に関係ない事柄などをここに掲載する。

★蔵王温泉「古勢起荘別館」の夕食メニュー



★今回の旅行の行程表

| 山形の旅【山寺、銀山温泉、修験道の出羽三山を巡る】 2023年7月16日 植木記 | | |
|--|---|--|
| 旅のコンセプト:日本の古き良き時代、その心に触れる | | |
| 企画の背景:日本古来の神道と茶道をこよなく愛するフランス人(50代男性、日本語堪能)が来日するので、彼に古き良き日本を知ってもらうために企画 | | |
| 日程 | 行程 | 宿泊 |
| 7/30 (日) | 東京駅8:08(山形新幹線つばさ127号)→11:04山形駅 レンタカーを借り、以降レンタカー移動、山形駅→(59km1時間)→山寺の立石寺(1015段の階段を登り参拝1.5時間)→(49km1時間)→15時宿着 ※昼食はコンビニで買い途中で食べる(全ての日) | 銀山温泉古勢起荘別館 0237-28-2322 温泉街のある川側の部屋 2間続きの部屋×2を予約 約21000円/人 |
| 7/31 (月) | 宿8時30分→(約85km1.5時間)→湯殿山駐車場 駐車場→(徒歩30分)→湯殿山本宮(参拝30分)→(徒歩30分)→駐車場→(45km1時間)→羽黒山駐車場 歩いて5分で宿坊着、その後に羽黒山神社など周辺を散策、国宝五重塔は工事中で拝観できず | 羽黒山の宿坊 齋館 0235-65-2357 羽黒山頂上付近にある宿坊 バスタオルや寝間着などアメニティあり 11000円/人 |
| 8/1 (火) | 宿8時30分→社務所→(59km1時間)→月山スキー場→(リフト)→リフト上駅→(登山約1.5時間)→月山頂上→(下山約1時間)→リフト→スキー場→(59km1時間)→16時30分山形駅 17:05分山形駅(新幹線つばさ154号)→東京19:48 | 後泊組のみ 蔵王温泉 吉田屋旅館 023-694-9223 2連泊で2部屋予約 朝食付き 約9100円/泊・人 |
| 8/3 (木) | 後泊組のみ 9:03分山形駅(新幹線つばさ132号)→東京11:48 | |

★ジンギスカン鍋発祥の地は？

蔵王温泉はジンギスカン鍋発祥の地だと宣伝している。確かに温泉街を歩いていると至るところにジンギスカン鍋の旗が立っている。しかし現状ではジンギスカン鍋は蔵王温泉よりも、北海道それも札幌が有名だ。

一般的に発祥の地というのは諸説あるもので、岩手県遠野市や長野市でも自分たちの街がその

起源だと主張している。この類の話は先に言ったもの勝ちという側面も多くある。

いろいろ調べてみると、ジンギスカン鍋の発祥の地は東京らしい。1936年（昭和11年）にジンギスカン料理専門店「成吉思荘」が開店した。そして同じ年に札幌の「横綱」という店にもジンギスカン鍋のメニューが登場している。

これに蔵王温泉の歴史を重ねてみる。蔵王温泉は110年頃に発見されたと伝わる古い温泉で、昔は高湯と呼ばれていた。転機は1950年（昭和25年）毎日新聞社主催の新日本観光地百選の公募に対し、地元民が葉書をたくさん書いた。いわゆる組織票で蔵王は山岳部門で1位になった。これを受けて地元は熱狂し、温泉名を蔵王温泉に改称した。

つまり山奥の湯治場だった温泉地が1950年を契機に発展を始め、その一手段としてジンギスカン鍋を使ったのだろうと推測できる。それよりも14年早く東京や札幌でジンギスカン鍋が登場しており、その期間には太平洋戦争という大きな出来事も発生している。

羊の肉を焼くだけの料理は誰でも考えられるので、全国至るところで起源があってもおかしくない。だから私はその名前に注目する。

ジンギスカン鍋の起源、これも諸説あるが、命名したのは駒井徳三という人で1932年（昭和7年）の満州国建国に深くかかわった人物だという。そしてその名前は源義経が北海道からモンゴルに渡ってジンギスカンになったという義経=ジンギスカン説からきたものと言われている。

これは余談だが、私は友人から「成吉思汗の秘密」という本を強く勧められ、凄い勢いで読み終えて感動した。それは小説だが、源義経は平泉で亡くならず北に逃げて北海道経由で大陸に渡りジンギスカンになったことを裏付ける検証を行うストーリー展開で、東北北部や北海道のいろいろな場所でその痕跡が残っているという。

駒井徳三は日本の希代の英雄である源義経がジンギスカンになっていて欲しいという思いを持って、あの羊の肉の料理にこの名前を付けたのだろうと私は思う。

残念ながら蔵王温泉は平泉から100km以上南にある。義経が逃げた方向ではない。むしろ平泉の北に位置する岩手県東野市や北海道札幌の方が駒井徳三の思いに沿っている。

ジンギスカン鍋という名前が全国的に有名になってから、羊の肉を鉄板で焼く料理はこの村でも古くからやっていたという主張ならば十分に理解できる。